

野馬台讖は吉備真備がもたらしたか

— 藤原広嗣の上表文を読む・補遺 —

辻 憲 男

要旨

一、藤原広嗣の上表文中の「讖記曰胡法滅國亡」と、野馬台讖の延暦九年注の中の「衡者胡法滅佛法守倭云々」「胡法滅者國隨也云々」「佛法滅國邑亡」とは同じ文献から出るものであろう。

二、藤原広嗣の上表文が真正な上代文献であるとすれば、そこに引く「讖記」の一条も、天平十二年（七四〇）以前にすでに我が国に伝来していた文献であったであらう。

三、藤原広嗣が排斥した吉備真備（および玄昉）は、漢土の讖緯説に通曉していたが、「讖記」が舶載書であるとすれば、吉備真備が天平七年帰国時に持ち帰った可能性があらう。その呼称はおそらく「野馬台讖」ではなかったであらう。

『群書類従』神祇部所収の『松浦廟宮先祖次第并本縁起』の中に藤原広嗣の上表文なるものを引用した箇所がある。それは四六体の漢文で字数約千九百字、種々多数の漢籍と仏典を引照補綴し、

①天地の災異と凶兆

②玄昉の背徳と悪行

③仏法と国家の危機

④軍備縮小政策の非

⑤玄昉・真備の結託と奸智

の五箇条を論じて、序と結を付した文章である。かつて筆者はこの上表文を上代の真正な遺文と見なし略注を施したことがあるが、その第②段の冒頭に「讖記曰胡法滅國亡」とある一句がかの「野馬台讖」に関するものであることは不敏にも思い至らなかった。後世の文献に記されるところの野馬台讖（野馬台詩）は五言二十四句、全百二十字の律文であるが、最も古く信じ得る逸文としては『日本書紀私記』丁本が引く「東海姫氏国」の一句があるのみ（『釈日本紀』巻一にも引く⁽¹⁾）、次いで『江談抄』巻五に匡房が引く「天命在三公。百王流畢竭。猿犬稱英雄。」の三句が知られるのみであった。

ところが近年、鎌倉時代末期の成立という『延暦寺護国縁起』の中に野馬台讖を引用した箇所があり、その「延暦九年注」に「衡者胡法滅仏法守倭云々」「又云胡法滅者国随滅也云々」「又云茫茫遂為空謂仏法滅国邑亡」等とあることが明らかにされた。⁽²⁾ この注文の「胡法滅」「国亡」の字句がわずかに右上表文の「讖記曰胡法滅國亡」とあ一条と一致するのである。即ち、延暦九年（七九〇）の年紀に間違いがないとすれば、野馬台讖（宝志讖）はそれ以前に伝来していたことになるが、さらに溯って、広嗣の上表文が偽作でないとすれば、すでに天平十二年（七四〇）以前に知られていたことになる。在唐十九年に帰国した真備が持ち帰ったという推測もあり得よう。ただし『延暦寺護国縁起』の引く讖の本文は「丹水流盡後。天命在三公。百王流畢竭。猿犬稱英雄。皇流鳥野外。鐘鼓誼國中。青丘與赤子。茫茫遂為空。」の八句のみ（『続群書類従』釈家部、『大日本仏教全書』寺誌部）、後世流布した本文二十四句の後尾の部分に相当するが、しかし以上のいずれにもこの「胡法滅國亡」の五字句は見

えない。憶測するところ、延暦九年注は「又云々云々」の形で区々引用されたために、注文と識本文とがいつか錯雑混交したのもあろうか。「胡」の一字が難解であるが、この一句は仏法が衰頹すれば国家が滅亡するという意味であり、宝志識の逸文と見て不都合がないであろう。本稿の主旨は以上のごとくであるが、以下には前稿の補遺として、

(一) 前稿以後に知り得た本文についての異同

(二) 典故に関わる略注の追補

(三) 参考とすべき類似の文章の例〔各本文は省略〕

を順に記し、その後、前稿上表文の句読を一部訂し、序、①②③④⑤、結の七段に区分した校訂本文を掲げるところにする。

注(一)『新日本紀』卷一に、

問。此國謂東海女國。又謂東海姬氏國。若有其說哉。

答。師說。梁時。寶志和尚識云。東海姬氏國者。倭國之名也。
(国史大系本一一頁)

とある。また右傍線部と同文が『日本書紀私記』丁本にあり、謂を稱に、哉を乎に作る(国史大系本一八六頁)。

(2)『延暦寺護国縁起』本朝王法延暦以後嘉運以当山仏法持国本縁第八に、

野馬臺懺云。(大唐梁代寶志和尚述。十一面觀世音化身也。)

丹水流盡後 天命在三公
百王流畢謁 猿大稱英雄
皇流鳥野外 鐘鼓誼國中
青丘與赤子 茫々遂爲空

已上

延暦九年注云。

丹水流盡。(千八女人帝盡。又馬野女帝崩也。是清原

孫盡故曰天命。運逮近所孫大納言故三公一書云。)

又云。月水湯而衡主者。(千八女人王盡而三公成王也。)

衡者胡法滅佛法守倭云々。

又云。胡法滅者國隨也云々。又云。茫々遂爲空。謂佛法滅國邑亡。國破宗破終無君。長終成曠野云々。

謹案和注意云。……(以下略。『統群書類從』活字本による)

とある。

(3) たとえば『応仁記』所引の野馬台詩は次のとおり(書陵部本による)。

東海姫氏国	百世代天工	右司為輔翼
衡主建元功	初興治法事	終成祭祖宗
本枝周天讓	君臣定始終	谷填田孫走
魚鱸生羽翔	葛後干戈動	中微子孫昌
白龍遊失水	窘急寄胡城	黃鷄代人食
黑鼠飡牛腸	丹水流尽後	天命在三公
百王流畢竭	猿大称英雄	星流鳥野外
鐘鼓喧國中	青丘与赤土	茫々遂為空

(一) 本文異同 (群書類従活字本を底本とし、内閣文庫本、伴信友考注本とのおもな異同を示す) (これらは前稿に示した四箇所と併せて後掲の校異欄に記し、校訂に用いる)

- | | | |
|----------------|-------------|-----------|
| (1) (前稿11頁3行) | 少、小 (内閣文庫本) | |
| (2) (前稿13頁6行) | 日、曰 (内閣文庫本) | |
| (3) (前稿16頁11行) | 淫、淫 (内閣文庫本) | 底本「嬌」は誤字。 |
| (4) (前稿19頁4行) | 蕞、蕞 (内閣文庫本) | 底本「最」は誤字。 |
| (5) (前稿23頁6行) | 表、長 (内閣文庫本) | |
| (6) (前稿26頁3行) | 文、成 (内閣文庫本) | |

(二) 略注追補

1 乃賢乃聖克文克武（前稿10頁6行） 『尚書』大禹謨に「乃聖乃神乃武乃文」とある。堯帝を称えたこの句を踏まえた。

2 讖記曰胡法滅國亡（前稿14頁6行） 「讖記」は「野馬台讖」をいうか。「胡法滅國亡」の五字句は「野馬台讖」の逸文または注記と思われる。『延暦寺護国縁起』に引く野馬台讖（宝志讖）の「延暦九年注」に、「衡者胡法滅仏法守倭云々。又云胡法滅者国随也云々。又云茫々遂為空、謂仏法滅国邑亡」とある。「胡」字については未考。

3 表短（前稿23頁6行） 内閣文庫本に「長短」とあり、底本「表短」はやはり誤りである（前稿24頁注10行）。長短は長短説、合縦連衡の説。

4 漢文聖徳（前稿26頁3行） 内閣文庫本に「漢成聖徳」とある。直前の朱雲の故事に出る漢の成帝の聖徳を言うか。

（三）類似の文章の例

A. 勘文

（1）「勘申」藤原敦光 保延元年（一一三五）（本朝統文粹、日本思想大系『古代政治社会思想』）

※内容は①天地変異人民疾疫事、②去年風水有難今年春夏飢饉事、③陸地海路盜賊旁起事、の三箇条。典拠書目としては、漢書天文志、洪範五行伝、礼記、周礼、六韜、漢書、後漢書光武紀、貞観政要、後漢書五行志、漢書五行志、礼記、礼記鄭玄注、群書治要、周書、春秋繁露、孔子家語、管子、墨子、後漢書、尚書舜典、礼記、呂氏春秋など。

（2）「革命勘文」三善清行 昌泰四年（九〇二）（群書類従、日本思想大系『古代政治社会思想』）

B. 奏議

- (1) 劉向「奏」〔『漢書』卷三十六、『文体明弁』卷二十六〕
 (2) 『文選』卷四十「彈事」、卷三十九「上書」、卷三十六「文」〔策秀才文〕

C. 対策

- (1) 『経国集』卷二十・策下

1 紀朝臣真象

天平宝字元年（七五七）十一月十日

2 栗原連年足

菅原朝臣清公問「天地始終」「宗廟禘祫」

3 道守朝臣宮繼

同右「調和五行」「治平民富」延暦廿年（八〇二）二月廿六日

4 大日奉舍人連首名

5 百濟君倭麻呂

慶雲四年（七〇七）九月八日

6 刀利宣令

7 主金蘭

8 下野虫麻呂

9 葛井諸会

和銅四年（七一）三月五日

10 白猪広成〔葛井広成〕

11 船連沙弥麻呂

天平三年（七三一）五月八日

12 藏伎美麻呂

天平三年（七三一）五月九日

13 大神直虫麻呂

天平五年（七三三）七月廿九日

- (2) 『菅家文草』卷八・対策

貞觀十二年（八七〇）三月廿三日省試対策文二条「明氏族」「弁地震」

校訂本文

臣聞。昔者天子有諍臣七人。不失天下。

諸侯有諍臣五人。不失其國。

是故三王御國。恐有過而不聞。

五帝治世。懼忠言之不達。

或懸旌進善。或置木召謗。

伏惟。陛下乃賢乃聖。克文克武。重華放勛。

何得間然。可謂黃河一澄。幸逢聖運哉。

但聖人千慮。是有一失。

頃小人道長。君子道消。上下道隔。民不安堵。

加以昊天誥譴。嗟有丁寧。群臣上下。未聞極言。

臣子之道。豈若斯哉。

臣家開闢以來。及至今日。鼎食累世。冠蓋相連。

恩賞超於呂霍。榮寵類於伊周。

覆載之恩。死而不朽。

豈如荊軻感一旦之恩。爲燕報讎。

張良思五世之寵。爲韓威秦。

若斯而已。雖觸龍鱗。不敢不陳。

臣聞。皇之不極。謂之不韙。

時則昊天示變丁寧。君上若改過修德。轉禍爲福。

知而不改。天則罰之。

然則天平五年及至十一年。并六箇歲。太白徑天。

案劉向五記論曰。太白少陰弱。不得專行。

故以己未爲界。未得經天而行。經天則晝見。

其占爲兵。爲大臣。爲民。主強國弱。主弱國強。

臣勝主。此之攻占可畏也。

重以去天平十一年十一月廿七日。太白晝見。在心度日。

正午時見未申。上有芒角。最可畏之。

稷在申曰。心爲天王。海內主故置積率而衛己。

五星極此度。而有變者。主者惡之。

雖魏晉末代君臣同床時。而未有太白少陰在心上而晝見也。

天平十一年正月廿九日災可畏。大史所知。故不勞陳。

二月廿九日夜半。地震蕭牆之內者又詳也。

大史所奏。故不煩重。

(以上、序)

(以下、第①段)

稷、伴信友考注ニ「干支」ノ訛誤カトイウ。

曰、日(底本)

十二年二月。陰獸登樹。奪陽鳥之巢也。

以五行傳按之。恐有賊人奪君位之象乎。臣愚一矣。

讖記曰。胡法滅國亡。頃將者佛法漸頹。最可畏也。

(以下、第②段)

何則結集正教之日。十地菩薩四果聖人。咸集一處告誓言。

從此結集以後。一言一字不得增減。

然則增者失音。減者迷律。

傳內律教禁斷著正五位色。

而今僧正玄昉。恒著紫袂袈裟。

一頃違正法。令諸僧尼漸染邪道。豈如此乎。

又諸如來三乘教中。未曾聞流放僧侶制。僧尼有罪。即苦使耳。

而今玄昉私制邪律。流放僧尼。

內挾舐糠之心。外曜指鹿之威。

舐糠、舐糖(底本・内閣本)

佛法之賊亦何如斯。

又出家人者離出國家如牢獄。棄捨妻兒如著枷鎖。

不得畜養奴婢牛馬。酤酒屠肉耕作商賈。

而今玄昉畜養奴婢。興作舍宅。

聚積財寶。釀酒屠宰。

作農商侶。一同白衣。

法滅之漸彌扇。外道之跡頓起者。一何悲哉。

又出家人者一切衆生大導師。故堅制威儀。以導三有。
又僧正者佛法綱紀。法興廢緣此一僧。

然此僧無頭陀安居。種々威儀。

而香華飾身。愛著女色。宛如白衣無戒有情。

又十地菩薩非肉眼之所能見。

坐禪靜慮處非姪欲所緣之境。

然詐說現身值遇十地菩薩。矯言身證坐禪道。

昔聞。大夫汙穢正教。今見。玄昉欲絕法綱也。

遂今令金身丈六佛眼流淚。矯下賤女子。僞稱彌勒。

豈非法滅之相哉。臣愚二矣。

金光明最勝王經說曰。

由諸天護持。亦得名天子。三十三天主。分力助人主。

若王作非法。親近惡人。三十三天衆。咸生忿怒心。

天主不護念。餘天咸棄捨。國所重大臣。朽橫而身死。

惡鬼來入國。疾疫遍流行。若有諂狂人。當失於國位。

由斯損王政。如象入花園。

然則頃歲。賢臣良將。零落殆盡。

百姓死散。里社爲墟。

疾疫流行。時無虛歲。

姪欲、姪欲（底本）

（以下、第③段）

嗟乎興廢之機。係此一時。可不勉哉。臣愚三矣。

我聖朝之爲國也。光宅日本。臨長安而竝明。

(以下、第④段)

包括萬邦。對唐王以爭雄。

但唐王恒云。天無兩日。地無二主。

無大唐則日本。無日本則大唐。豈有東帝西帝者乎。

遂挾姦心。窺我上國者。歲已長也。

蕞爾新羅虎狼爾。心含會稽之耻。畜勾踐之怨。

蕞爾、最爾(底本)

祈禱群望。構禍國家者。日亦久乎。

北狄蝦夷。西戎隼俗。狼性易亂。野心難馴。

往古已來。中國有聖則後服。朝堂有變則先叛。

其爲俗也。子報父敵。孫酬祖怨。

但以畏陛下之威武。服聖朝之文教。

匿爪牙於毛中。戢羽翼於鱗下。

縱令朝堂有盱食之急。邊城有烽火之警。

警、驚(底本・内閣本)

豈有忍父祖之宿怨。忘子孫之甘心哉。

頃者賢臣已沒。良將多亡。

百姓零落。里社爲墟。

四隣具聞。八表共識。

當今練習五兵。振威四海。先諍後實。災變或視。

能崇賢選士。撫慰萬邦。割却庸租。簡易庶務。

復八柱之已傾。張四維之將絕。

然則遠肅近安。民豐國富。太平之基。華戎共欣。

康哉之歌。朝野同音。

豈可偃武棄備。將士解體。

修徐偃之仁義。從蹈楚之詐謀乎。

兵法曰。天下雖安。忘戰必危。

勿恃彼之不來。恃我有備而待也。

然則解却兵士。出賣牧馬。抑止射田。

若斯事條。未見其可。臣愚四矣。

又僧正玄昉。掌中有通天之理。直達中指。

傳聞。大唐相師曰。當作天子也。竊負此言。獨窺寶位。

熒惑陛下。欺詐后宮。

讒絕藩屏之族。令朝廷無維城之固。

放逐棟梁之家。令左右絕忠良之臣。

屢出酷政。令天下積怨於陛下。

舉動大役。令萬民疲弊於興作。

偃武棄備。令國家忘戰。

愛養死士。不啻萬金之資貨。

(以下、第⑤段)

所有行事。一同文種滅吳九術。

又從五位上守右衛士督兼中宮亮近江守下道朝臣眞吉備。

邊鄙傳子。斗筭小人。遊學海外。尤習長短。

有智有勇。有辨有權。

口論山甫之遺風。意慕趙高之權謀。

所謂有爲姦雄之客。利口覆國之人也。

亦作玄昉左翼。而蔽陛下明德。

臣熟視二盜。契爲比目。

雖陛下撫育之恩超同位。而進退周旋猶如餓虎。

先知二盜必有大求乎。若不早除。恐貽噬臍之憂也。

大公曰。渭水不塞將成江河。兩葉弗去將用斧柯。

夫視日月之光不爲明目。

聽雷霆之動非爲聰耳。

所謂上智者居高堂之上。知日月之次序。

見瓶水之中。知天下之寒暑。

臣請賜尚方劍。芟夷二盜。省薄苛政。以扶傾運。天下幸甚幸甚。

誅無忌而謝吳王。楚子故事。

戮晁錯而賜七國。漢帝上策。臣愚五矣。

臣聞。鴟鴞山鳥猶惜毀巢。

長短、表短（底本）

（以下、結）

況乎我國家宗廟社稷。

與日月競其照臨。與天壤齊其終始。

然爲玄昉姦賊吉備凶豎所謀者。豈不哀哉。

忠臣義士。以何面目。戴天蹈地乎。

屈師傅。朱雲高志。折檻非罪。

漢成聖德。幸照盆下。納臣愚忠。

所謂負薪之言。薨薨之事。聖人猶擇。天下幸甚。

成、文（底本）

おもな研究文献

- ・池田敬子「『花の洛』と『野馬台詩』——巻本『応仁記』をめぐる——」『国語国文』一九八四年二月
- ・笥久美子「『野馬台詩』のいたずら」『日本史研究』一九九、一九八七年七月
- ・黒田彰「『応仁記』と『野馬台詩』」『関西大学国文学』六六、一九八九年十二月。『中世説話の文学史的環境』一九九五年所収
- ・小峯和明「『野馬台詩』の言語宇宙——未来記とその注釈——」『思想』一九九三年七月
- ・小峯和明「『説話と注釈——歌行詩』の野馬台詩注から——」『説話文学と漢文学』一九九四年
- ・東野治之「『野馬台詩』の延暦九年注」『大阪大学教養部研究集録』四二、一九九四年三月
- ・深沢徹「『河図・洛書』としての『宝誌識』——生成される『識緯』の言説・中国篇——」『説話文学研究』二九、一九九四年六月
- ・牧田諦亮「『宝誌和尚伝攷——中国における仏教靈驗受容の一形態——』」『東方学報京都』二六、一九五六年三月
- ・重野安繹『『右大臣吉備公伝纂』』一九〇二年
- ・宮田俊彦『『吉備真備』人物叢書』一九六一年

・辻憲男「藤原広嗣の上表文を読む」神戸親和女子大学研究論叢三〇、一九九六年一〇月
・辻憲男「阿倍仲麻呂と吉備真備」国文学解釈と鑑賞、二〇〇二年六月

・新訂増補国史大系『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』、一九三二年

・和田英道編『応仁記・応仁別記』古典文庫三八一、一九七八年

・神鷹徳治編『歌行詩諺解』勉誠社文庫、一九九一年

・新日本古典文学大系『本朝一人一首』小島憲之校注、一九九四年

・新日本古典文学大系『江談抄・中外抄・富家語』山根對助・後藤昭雄他校注、一九九七年

・串田久治『中国古代の「謡」と「予言」』、一九九九年

・平勢隆郎『中国古代の予言書』講談社現代新書、二〇〇〇年

追記 脱稿後、小峯和明氏『野馬台詩』の謎』が上梓された。右掲論文をもとに諸問題を論じられている。二〇〇三年十二月初校時に記す。